

あいまいさを大事に

明日も喋ろう

言葉、届いてますか

2

あいまいさが、大事。それが、1500人の命をホスピスで看取ってきた内科医の、実感だった。だから今の言論状況は危ない、徳永進さん(68) 鳥取市は感じる。何が正しいかを一方的に決める権力も、一つの正義

に固執する集団も。たとえば、自民党の憲法草案。「家族は、互いに助け合わなければならない」とある。そうだろうか。身勝手に家族泣かせの男が危篤に陥り、ホスピスに担ぎ込まれた。



野の花診療所

徳永さんが2001年に鳥取市内に開設した19床のホスピス。近隣の人は自宅で最期が

過ぎせるよう、診療所から往診にも出向く。診療所の風景をつづった著書に「どちらであっても 臨床は反対言葉の群生地」(岩波書店)など。



ホスピス「野の花診療所」では、死の隣に光や笑みがある＝鳥取市

ホスピス医師 徳永進さん(68)

家族は嫌な思いを忘れ、「生きて」と体をきすった。が、男が持ち直し暴言を吐くと、「死ねばよかったの」と悪態が口をつく。臨

終間際、また変わる。「生きて、もう少しだけ」と。家族は男を愛したのか、憎んだのか。揺らぐ言葉を「変節」と非難できるか。そんな姿を見つめてきた徳永さんは、「家族は親しい他人」と理解した方が、受け止めやすいと考える。なのに、最高法規で「助け

合う家族像」を押しつけられ、逆に社会にあつれきを生みかねないと思う。1960年代末、京大医学部にいた。「機動隊に殴られたら痛いから」とデモの誘いに尻込みする学生だった。「革命なんだ。自分たちの志は正しい」と言う同級生らの運動はその後、内ゲバを経て失速する。

「『正しい』言葉に圧死した」と感じている。臨床の現場に、絶対的な「正しさ」はない。たとえば、がん告知。研修医時代、「しない」のが正しいと教わったが、その後、欧米流の「する」が当然になった。だが、患者の疑心暗鬼を招いたり、生きる気力を奪ったり、どちらも失敗した。

悩んでいたころ、山陰海岸の民宿のある女将が、腸閉塞を起こして運ばれてきた。進行性胃がんを、関西

の病院で手術したばかり。医師は告知していないのに、既にかんを知っていた。聞けば、前の手術後、病院の談話室で夫とこんな短い会話をしたという。妻「いけなんだか？」夫「たんぼのお茶、飲んでったのになあ」妻「ほんとかあ」医師が「告げる」のも、家族が「伝える」のもなく、何となく「伝わりさせない部分も何か味があるなあ」と気づいた。

今は、知らないふり、漠然とした態度で看取りたいと望む家族に、「やりましよう」と応じている。絶対を疑い、あいまいさを大事にする。主義より、生活感ある言葉を生かす。「案外、それがちゃんと、大切なことが『伝わる』秘訣かもしれません」(阿久沢悦子)